所沢図書館だより
復刊7号（通巻85号）
題字　高橋　玄洋　氏

復刊 いずみ

目　次

P.1　すべての子どもに読書の楽しみを
P.2-4　文学講座「魅惑の古典文学」
P.5　トベアの分館めぐり
P.6　フレッシュマン登場

すべての子どもに読書の楽しみを

「第2次所沢市子どもの読書活動推進計画」を策定しました

「所沢市子どもの読書活動推進計画」の計画期間終了にともない、五年間の取組の成果と課題を踏まえて、平成26年３月に「第２次所沢市子どもの読書活動推進計画」を策定しました。

この計画は、**「所沢市のすべての子どもが、あらゆる機会とあらゆる場所において、自主的に読書活動を行うことができるようにします」**という基本理念を掲げ、それを実現するための取組を掲載したものです。

計画の三つの基本方針の内容と、図書館の取組を紹介します。

Ⅰ　子どもの読書環境の整備・充実

(1)子どもが読書に親しむ機会の提供・充実

①家庭における読書活動の促進

◆親子おはなし会

絵本やわらべうたを赤ちゃんと一緒に楽しみます。お気に入りの絵本に出会ったら、ご家庭でもぜひ読んであげてください。

②図書館における読書機会の提供・充実

◆おはなし会

おはなしや絵本の読み聞かせをしています。季節や行事に合わせた特別なおはなし会もあります。

ぜひ、参加してみてくださいね。

◆かがくあそび・工作教室

主に小学生を対象に楽しい工作や科学あそびを実施しています。

しゃぼんだまであそぼう

③学校・園における読書機会の提供・充実

④地域における読書機会の提供・充実

(2)子どもの読書活動を推進するための環境の整備

①身近に本のある環境づくり

②学校図書館の機能充実

③図書館の機能充実

Ⅱ　学校・地域等の連携による推進体制の整備

(1)学校・園と地域の連携

①図書館利用教育の推進

②学校図書館への支援

◆学級訪問

図書館司書がブックトーク(本の紹介)や図書館の利用案内をします。

◆職場体験の受け入れ

児童・生徒が貸出・返却業務など図書館の仕事を体験します。

(2)地域における関係機関の連携

①生涯学習施設・保健施設等との連携

②地域団体・ボランティア等との連携

(3)推進体制の整備

(4)子どもの読書に関わる人材の育成

Ⅲ　子どもの読書活動への理解や関心の普及・啓発

(1)読書活動の啓発・広報

(2)優良な図書の普及

◆ブックリストの作成・配布

小中学生におすすめの本をブックリストで紹介しています。

平成二十五年度 図書館文学講座

『魅惑の古典文学』

平成26年1月30日（木）
平成26年2月13日（木）

講師　長戸　千恵子　氏
（秋草学園短期大学文化表現学科非常勤講師）

本館では、「魅惑の古典文学」と題して、第一回は、所沢の地名の由来の一つと関わりのある在原業平について、第二回は、講師の長戸先生のご専門である『蜻蛉日記』を中心とした平安時代の日記文学について、二日間にわたり講義をしていただきました。その抄録を掲載します。

第一回　「在原業平と王朝の雅」

『所沢市史』に、所沢の地名の起源の一つとして、「平安朝時代在五中将在原業平朝臣」が関わっているという記述があります。在原業平と言えば、文学史ではなかなかの有名人。この講座に参加して下さった皆さんにとっては、百人一首で有名なあの業平かと思い出される人物だと思います。平安時代約四百年の中では前期の歌人として知られています。『伊勢物語』という平安時代の物語では、在原業平と思しき「男」が作品全体の主人公と目されております。『所沢市史』によると、この在原業平が、東国巡行の折に野老（ところ）が野生しているのを見て、「野老の沢か」と口ずさんだのを、里人が聞き伝えて、所沢（野老沢）の地名が生じたと伝えられていたとのことです。

在原業平は、伝説化の著しい人物ですが、平城天皇の皇子を父に持ち、桓武天皇の皇女を母に持つ、父方母方のどちらから見ても天皇の孫にあたる高貴な血筋であったことが、記録に残っています。天皇の血筋でありながら臣下になったというだけでも思い当たる方もいらっしゃるかと思いますが、あの『源氏物語』の光源氏のモデルの一人とされています。在原氏で、五男であり、中将になったことから「在五中将」とも呼ばれました。また、歌人として六歌仙・三十六歌仙の一人に数えられております。『三代実録』の「体貌閑麗。放縦不レ拘。略無二才学一。善作二和歌一。」という業平評に見えるように、美男で和歌が得意だったと伝えられています。

在原業平と思しき男が主人公と目される『伊勢物語』は、和歌を中心とした小さな話（章段）を集積した歌物語というジャンルの作品です。作者は不詳、現在一般に読まれている写本では百二十五章段となっています。採録された和歌の中で作者が確認できるものは、在原業平のものが一番多く、大部分の章段が「昔、男……」という冒頭表現を持ち、初冠の段に始まって辞世の段で終わっています。それによって、在原業平を思わせる「昔男」の一代記風の緩やかな連関の様相を呈しています。内容は、恋愛に関するものに加え、親子の情や主従の情、友情、旅情など、人生の諸相が描かれています。

講座のタイトルに入れた「王朝」は、文学史では従来、「平安時代」とほぼ同義の言葉として用いられています。在原業平は平安時代の歌人であり、『伊勢物語』も平安時代の作品で、かつ、雅（みやび）の文学とされています。

『伊勢物語』の初段で、『源氏物語』への影響も考えられる初冠の段では、美しい姉妹を垣間見た「昔男」が、すかさず自分の着衣の裾を切り、その信夫摺の模様にことよせた恋の歌を書いて贈っています。それが、この章段の末尾で「みやび」と評されています。「みやび」は、「風流」と現代語訳されることが多いのですが、一種の美意識を表す言葉になっているのではないかと思います。

『所沢市史』には業平の東国巡行と地名の起源を結びつけた伝承が記されていますが、次に取り上げる『伊勢物語』第九段は、「昔男」の東下りの章段です。絵になる場面が多くあり、何度も絵画化されています。隅田川で都鳥を見て都に残してきた人を思う歌を詠む有名な場面で、この第九段は終わります。『古今集』にも見える歌ですが、『古今集』には『伊勢物語』から東下りに関する歌が採られた可能性が高く、他の正式な古記録に業平が東国に行ったということは見えないため、現在では、この東国巡行はフィクションであろうと考えられています。ただ、『伊勢物語』という作品においては、東下りの話や和歌が貴種流離譚の趣を醸し出しております。

また、「昔男」と高貴な女君達との恋を語る章段群もありますが、やはりフィクションの可能性が高

いと思われます。例えば、第四段は、「**月やあらぬ　春やむかしの春ならぬ　わが身ひとつは　もとの身にして**」という業平の代表的な歌を引きつつ、業平と二条后高子との恋を思わせる章段となっていますが、この恋は事実とは考えにくく、フィクションだったと思われます。

以上のように、『伊勢物語』は虚実とりまぜて成った物語であると考えられます。業平に関する史実かどうかということよりも、和歌を中心に醸し出されている情緒が『伊勢物語』の魅力であり、それが一つの「王朝の雅」の表れではないかと、私は思っております。

興味がおありでしたら、参考文献もたくさんありますし、皆様ご自身で味わっていただければと思います。

第二回　「平安の人生と心を描く日記文学」

日記文学と言いますのは、平安時代に初めて生まれたジャンルです。日々の記録としての日記とは異なり、作者が人生のある時点で自分の人生を回想して書いたもので、回想記、自伝的な文学ともいうべきものです。作者が自分の人生を題材としつつ、書きたい主題のようなものがあって書いたものです。

文学史で日記文学の最初の作品とされているのは、紀貫之の書いた『土佐日記』です。また、女流日記文学の最初の作品は『蜻蛉日記』であり、次に、和泉式部と思われる「女」と敦道親王と思われる「宮」との恋の経緯を題材として書かれた、『和泉式部日記』があります。『紫式部日記』は、『源氏物語』の作者として知られる紫式部が書いたものであり、女房日記としての性格を有しています。また、『蜻蛉日記』の作者の姪である菅原孝標の娘が書いた『更級日記』は、約四十年間の回想記となっており、『蜻蛉日記』の系譜に列なるものとなっております。平安時代の最後の日記文学は、藤原長子によって書かれた『讃岐典侍日記』で、女房日記の性格を有しています。中世になっても日記文学は続いていきますが、平安時代の日記文学としては、以上のような諸作品が挙げられます。

今回は、平安時代の人生と心を描く日記文学としての性質が端的に示されている、『蜻蛉日記』を取り上げます。この作品は、作者の道綱母が、夫の求婚以来の我が身の上を振り返って執筆したものです。道綱母は、藤原兼家と結婚し、道綱を生みました。夫の兼家の家系は摂関家の家系であり、兼家も後に大きな権力を握るようになります。それに対して道綱母は、同じ藤原氏ではありましたが、中流貴族の受領階級の娘でした。道綱母は、中古三十六歌仙の一人として選ばれており、「きはめたる和歌の上手」と『大鏡』で評されています。和歌が得意だった人ですが、和歌を集めた歌集を編纂するのではなく『蜻蛉日記』を書いたということに、大きな意味があったと、私は思います。

『蜻蛉日記』全体の構成としましては、上・中・下の三巻に分かれており、上巻にのみ序文と跋文（ばつぶん）が付いています。序文の後は、兼家が求婚してきたところから始まります。兼家には、この時すでに中流貴族の娘である時姫という妻がありました。当時は、一夫多妻婚、通い婚の婚姻形態の時代でした。正妻格にあたる女性というのも、単に結婚した順番で決まるというわけではなく、妻の親の身分や夫の愛情の程度、子どもの数など、いろいろな条件で事後的に決まるものでした。ですから、既に時姫という妻がいても、そのために正妻格の妻にはなれないと決まっているわけではありませんでした。

上巻は、十五年間のことが書かれていて、雑多な内容の記事が含まれております。その中でも主要なテーマとしては、兼家との結婚、結婚生活の最初の危機である町の小路の女に関する出来事、肉親との悲しい別れなどが書かれています。ただし、悲しいことだけではないのも特徴です。兼家の上司であった親王と兼家夫人として歌のやりとりをすることは、かなり自慢げに書かれています。それ以外にも、兼家の妹であり村上天皇の寵愛を受けた登子との交流なども、

主要なテーマとして書かれています。このような、身分が高い人々との交流は、兼家との結婚により生じたものです。また、上巻の最後、跋文の前に位置する初度初瀬詣では、長い紀行文となっています。上巻の最初に序文がありますが、跋文と呼応した書き方となっているため、跋文と同時期に序文が書かれたのではないかと考えられます。

中巻・下巻は、それぞれ三年ずつのことが書かれているのに、上巻十五年間よりも分量としてはむしろ多いくらいになっております。中巻・下巻では、一つ一つの出来事に関する記述が詳しくなっているという変化があります。中巻になると、結婚生活の苦悩が深まってきて、作者の心のうちがより綿々と書かれています。上巻の最後の方で兼家邸の近くに転居するのですが、それにより住まいが近くなった時姫との間でもめごとが起こり、作者の方が、遠い場所に引越しをさせられるということや、兼家の新邸に、作者ではなく、時姫が迎えられるというような、作者にとっては辛いことが起こっていきます。今までにはない夜離れ、近江という女性と兼家との結婚の噂など、夫婦関係は悪化していきます。

下巻では、兼家と源兼忠の娘との間に生まれた子を、作者が養女にします。その養女に関する話が下巻の一つの主要なテーマとなっており、兼家と養女の再会はドラマチックに書かれています。また、息子の道綱も成長していき、「大和だつ女」などと歌の贈答をしたりする様子も書かれています。このように、養女や道綱といった子ども達に関することが、下巻では多くなっています。夫婦関係は悪化していきますが、子ども達の父親としての兼家とのやりとりは、続いていきます。しかし、父の計らいで中川に転居した後、兼家は一度も作者のもとを訪れていません。そのため、この転居がいわゆる床離れだったのではないかと思われます。床離れとは、わかりやすく言えば現代の離婚に相当するものです。通い婚であった当時、離婚というのはあいまいでした。男性の側は行く気がなくなり行かなくなればそれで離婚となりますが、女性の側ではいつ夫が来るかわからないため、『蜻蛉日記』にも、作者が兼家の訪れを期待している様子が書かれています。しかし、転居の後訪れがなかったため、この中川転居が床離れだろうと考えられます。そして、その翌年の記事で、下巻は終わっています。作者は、この『蜻蛉日記』の後、約二十年間生きてはいましたが、続きは書かれていません。それによっても、兼家に対する思いや兼家との結婚生活が、作者にとっては一番書きたかったことなのだと思われます。

『蜻蛉日記』の序文では、この日記を、極めて身分の高い人(や、その妻)の生活はどんなものかという先例にもしてほしいとしつつ、自分の身の上を書くということが明記されています。また、「過ぎにし年月ごろのこともおぼつかなりければ」と書いていることからも、回想記として書かれたことがわかります。

さらに、例えば、作者の結婚生活の最初の危機に当たる、町の小路の女に関する記事では、あの百人一首の「**なげきつつ　ひとり寝る夜の　あくるまは　いかに久しき　ものとかは知る**」という和歌が詠まれた際の状況や心情が書かれています。単に、このような歌を詠み合った、こういう出来事があったというだけではなく、自分のその時の心のうちが詳細に書かれています。一夫多妻婚の時代だったからと言って、夫が他の女の所に通っても決して平気だったわけではないことなど、複雑微妙な気持ちが描かれています。中巻になると、ますます内面描写が深化します。このように綿々と作者自身の心のうちを描くことは、文学史の上で『蜻蛉日記』が初めてであり、先例のないことでした。『蜻蛉日記』は後の作品にも影響を与えており、『更級日記』や『源氏物語』にも、いろいろな面で影響を与えております。

文学にしましても、当時の風習にしましても、この講座で触れたのは、そのごくごく一端にすぎません。今後も、皆様、ぜひ図書館の本を活用して、お楽しみいただきたいと存じます。

○講座参考・引用資料○

『所沢市史』　所沢市
『新編日本古典文学全集』
12・13巻　小学館　など。

トベアの分館めぐり
第６回
狭山ヶ丘分館

ぼくは図書館のマスコット「トベア」。６回目は、狭山ヶ丘分館を紹介するよ♪

狭山ヶ丘分館は狭山ヶ丘コミュニティセンターの３階にあるよ！

狭山ヶ丘分館【基本情報】

〒359-1151　若狭 4-2478-4

TEL 04(2949)1193　　FAX 04(2949)8577

西武池袋線狭山ヶ丘駅西口より徒歩５分

ところバス西路線（三ヶ島循環コース）

「和ケ原入口」下車

山村分館長さん こんにちは！今日は案内よろしくね。

トベアくん こんにちは！狭山ヶ丘分館にようこそ！

さあやちゃん。はじめまして！

狭山ヶ丘分館のマスコット「さあや」よ！いつも絵本の部屋にいるので会いに来てね♡

ぼくの探している本はどこにあるかな？この機械で探してみよう。

大人向けの特集コーナーだよ。毎月テーマが変わるよ。

いつも明るく元気な狭山ヶ丘分館スタッフです。皆さまのご来館をお待ちしています♪

フレッシュマン登場！

よろしくお願いいたします。

鈴木沙祐里

こんにちは。今年度から新しく所沢図書館本館の児童奉仕担当になりました、鈴木沙祐里と申します。小さい頃から本が好きで図書館に通いつめ、大学で司書の勉強をした私にとって、図書館はまさにぴったりの職場で、本当に幸運だと思っています。

カウンター業務・書架整理・レファレンス・おはなし会・学校との連携事業・事務作業など、図書館員の仕事は多岐に渡っていますが、これらを万遍なくこなせるプロの図書館員になれるよう、これからも仕事に励んでいきたいと思っています。また、子どもも大人も楽しめるこども室づくりを目指していきたいです。

まだまだ未熟者ですが、よろしくお願い致します。

曽田一平

小説を読み終えると短い書評を書くことを心掛けています。持論ですがよほど印象に残る本でない限り、月日が経つと本の内容は徐々に記憶から失われます。ちなみに私は幼い時期に読んだ本の内容をほとんど忘れてしまいました。ですが書評を書きためることで、いつでも頭の引き出しから当時抱いていた感想を思い出すことができるのです。読書好きな人もそうでない人も一度実践してみてください。2、3行書くだけでも十分です。その中から年度別に一番気に入った本を決めるのも面白いかもしれません。

昨年読んだ中で一番印象に残った本は小川洋子著の『猫を抱いて象と泳ぐ』。図書館員となった今年はどんな本と出会えるか、とても楽しみです。

夜間開館のお知らせ

日が落ちて涼しくなる時間に、図書館へでかけてみませんか。

本館・所沢分館・新所沢分館では、夜間開館を行っています。日中、お忙しい方も夜間開館をぜひ、ご利用ください。

本館

火曜日のみ**午後7時**まで開館

（7～9月は、**午後8時まで**）

所沢分館

火～金曜日は**午後7時まで**開館

新所沢分館

火～金曜日は**午後9時まで**開館

※その他の分館は**午後5時まで**の開館となります。また、祝日は全館**午後5時まで**の開館になります。

編集後記

◆平安衣装を身につけて、雅の世界にタイムスリップしたい。（T）

◆ゴーヤの緑が涼を運びます。（K）

◆この夏で、ペーパードライバーを卒業したい。（T）

◆近頃の異常気象がこわい。（Y）

◆夏だ！暑い！

毎日ごくろうサマー!!（S）

編集発行：所沢市立所沢図書館　〒359-0042　所沢市並木 1-13

ホームページアドレス　パソコン　https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp

携帯電話　https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp/k

	電話 / FAX		電話 / FAX
本館	04-2995-6311 / 04-2992-1421	富岡分館	04-2943-3636 / 04-2943-6680
所沢分館	04-2923-1243 / 04-2928-8195	吾妻分館	04-2924-0249 / 04-2928-8250
椿峰分館	04-2924-8041 / 04-2928-8148	柳瀬分館	04-2944-4023 / 04-2945-7236
狭山ヶ丘分館	04-2949-1193 / 04-2949-8577	新所沢分館	04-2929-1905 / 04-2929-1906
松井小学校図書館	04-2992-2796 / 04-2992-2797		

2014 年 7 月 31 日発行　復刊いずみ７号（通巻 85 号）